

翻 訳

ガ ー イ ウ ス

『法学提要』(Ⅲ)

早稲田大学ローマ法研究会

佐 藤 篤 士 監訳

熊丸 光男	高田普久男	田中 憲彦
谷口 貴都	仲内 英三	西村隆誉志
沼宮内 綱	原田 俊彦	和田 敏朗

二
二
八

138 マンキピウム権に服している者は奴隷のような地位にあるから、棍棒、戸口調査、遺言によって解放されると自権者となる。⁽⁶⁹⁾

139 だが、この場合、アエリウス=センチウス法は適用されない。⁽⁷⁰⁾したがって、解放する者および解放される者の年齢をわれわれは決して問わない。また、解放する者に保護者または債権者がいるかどうかも問わない。さらに、フーフィウス=カニニウス法によって制限された〔奴隷解放の〕数もマンキピウム権に服する者には適用されない。⁽⁷¹⁾

140 それどころか、これらの者は、彼らにマンキピウム権をもつ者の意思に反しても、戸口調査によって自由を獲得することができる。ただし、家父が自らに再握取行為で与えられることを条件として、〔他の者の〕マンキピウム権に与えた者は除外される。というのは、この場合には、家父が自分のマンキピウム権に〔その者を〕取り戻すことによって、ある程度自分の権力をもち続けると考えられるからである。これに対して、家父が加害行為を原因として〔被害者の〕マンキピウム権に与えた者は、例えば、家父が〔家父の権力に服する〕者のために盗の有責判決を受けて、その者を原告のマンキピウム権に与えた場合、その者をマンキピウム権にもつ〔被害〕者の意思に反して、戸口調査で自由を獲得できるとはいわれない。というのは、原告はこの者を金銭の代わりに受け取るからである。

141 われわれが最後に注意すべきことは、われわれは自分のマンキピウム権に服する者に対して侮辱的な言動をしてはならないということである。そのような場合、われわれは人格権侵害に問われることになるで

138 前掲123；後掲2, 160；3, 144を参照。

139 前掲38；18；42；47を参照。

140 後掲4, 75；79を参照。

(69) David-Nelson では「Ii」の代わりに「Hi」が用いられている。

(70) アエリウス=センチウス法 (lex Aelia Sentia) 後4年に制定された。

(71) フーフィウス=カニニウス法 (lex Fufia Caninia) 前2年に制定された。

あろう。また、加害行為を原因としてマンキピウム権に服する場合を除き、人はマンキピウム権に長く拘束されず、むしろ多くの場合、拘束は形式的で一時的なものである。

142 さて、他の分類に話題を転じることにしよう。すなわち、家父権にも、夫権にも、マンキピウム権にも服していない者のうち、ある者は後見または保佐に服し、ある者は、法上、そのいずれにも属しない。そこで、われわれは、後見に服する者と保佐に服する者を考察することにしよう。なぜなら、そうすることによって、法上いずれにも属しない他の者について理解することになるからである。

143 はじめに、後見に服する者についてみることにしよう。

144 権力に服している卑属のために遺言で後見人⁽⁷²⁾を指定することは、家父に許されていた。すなわち、男性は未成熟の場合に後見人が指定される。〈これに対して、女性はその年齢に関わりなく、さらに〉婚姻⁽⁷³⁾をなした場合でも後見人が指定される。なぜなら、古法学者は、女性はたとえ成熟年齢に達したとしても知力の薄弱を理由に後見に服する、と考えたからである。

145 したがって、ある者が遺言によって息子と娘に後見人を指定し、両者が成熟した場合、息子は後見を免れるが、娘は後見に服したままである。なぜなら、女性が後見を免れるのは、ユーリウス法⁽⁷⁴⁾とパーピウス=ポッパエウス法⁽⁷⁵⁾にもとづく有子の権⁽⁷⁶⁾による場合に限られるからであ

142 I. 1, 13pr. と同じ。

143 I. 1, 13pr. と同じ。

144 I. 13, 3とはほぼ同じ。Gai Epit. 1,7, 2; Vlp. 11, 1. 15; Vat. Fr. 229 [Paul. lib. sing. de testamentis] を参照。括弧内の語句は Kr. が文章に付加した。

145 後掲194; 3, 44; Vip. 11, 14. 15; Isidor. orig. 9, 7, 30を参照。

(72) David-Nelson では「tutores」が「〈tuto〉res」になっている。

(73) David-Nelson ではく〉の部分は欠落している。

(74) ユーリウス法 (lex Iulia) 前18年に制定された。

る。ただし、ウェスタ女神に奉仕する処女は例外である。彼女たちについて、古法学者も神職の名誉のために後見に服しないことを望んでおり、またそのように12表法にも定められている。

146 ところで、われわれは、男孫および女孫がわれわれの死後に〔法上〕⁽⁷⁷⁾これらの者の父の家父権に服することにならない場合にのみ、遺言によってこれらの者のために後見人を指定することができる。したがって、私の息子が、私が死亡したときに私の権力に服している場合、息子の子である私の孫は私の権力に服していたとはいえ、私の遺言によって後見人を指定されることはないであろう。というのは、私の孫は、私が死亡するとき当然にその父〔息子〕の家父権に服することになるからである。

147 ところで、他の多くの場合に、家父の死後に生まれた子が既に生まれた者とみなされるように、この場合にもこの者に、既に生まれた者と同様に遺言で後見人を指定することができると考えられた。〔ただし〕それはこの者がわれわれの生存中に生まれたならばわれわれの権力に服していたであろう場合に限られる。〈なぜなら〉⁽⁷⁸⁾これらの子を、われわれは相続人にすら指定できるからである。もっとも、家父の死後に生まれた家外の子を相続人に指定することは許されない。

146 I. 1, 13, 3と同じ。「法上」という語を Inst. は省略している。Gai Epit. 1, 7, 2 を参照。

147 I. 1, 13, 4 とほぼ同じ。後掲2, 130 ; 242 を参照。

(75) パーピウス=ポッパエウス法 (lex Papia Poppaea) 前9年に制定された。

(76) 女子は、生来自由人の場合には3人以上、被解放自由人の場合には4人以上の子をもつことで後見を免れた。

(77) David-Nelson では「jure」に [] はついていない。

(78) David-Nelson では < > の部分は欠落している。

(79) David-Nelson では < > の部分は欠落している。

(80) David-Nelson では「ac filiae」の代わりに「ac si filiae」が用いられている。

148 夫権に服する〈妻〉⁽⁷⁹⁾には、娘のように、また、息子の夫権に服する嫁には、孫娘のように、後見人を指定することができる。

149 ところで、最も正式に後見人を指定することができるのは、「私は私の子に後見人ルーキウス・ティティウスを指定する」⁽⁸¹⁾である。しかし、「私の子にとって」または、「私の妻にとってティティウスは後見人となれ」と記載された場合も正式に指定されたと認められる。

150 ところで、夫権に服する妻には後見人を選択することも認められている。すなわち、夫は、「私は私の妻ティティアに後見人を選択することを認める」というようにして、妻が自ら望む者を自分のために後見人として選択することを許すことができる。その場合、妻はすべてのこと、または、おそらく1つもしくは2つのことのために〈後見人を選択すること〉ができる。

151 なお、認められる選択は、限定されないものまたは限定されたものである。

152 限定されない選択は、われわれが前に述べたようなかたちで認められるのを常とする。限定された選択は次のようにして認められるのを常とする。「私は私の妻ティティアに後見人を選択することを1回だけ認める」または「2回まで認める」と。

153 これらの選択は互いに著しく異なる。限定されない選択を認められた妻は1回、2回、3回、それよりも多く後見人を選択することができる。これに対して、限定された選択⁽⁸²⁾を認められた妻は、選択が1回だ

148 前掲114; 後掲2, 159を参照。

149 Vat. Fr. 229 [Paul. lib. sing. de testam.] 後掲2, 289以下を参照。

150 Lex Salpens. 22を参照。括弧内の語句はLach. が付加した。

151-153 Lex Salpens. 22を参照。

(81) David-Nelson では直後に「〈私は私の妻に後見人〉 ルーキウス・〈ティティウス〉を付する」が挿入されている。

(82) David-Nelson では「angustam」が「angus <tam>」になっている。

け認められた場合、1回より多く選択することはできない。選択が2回まで認められた場合には、2回より多く選択することはできない。

⁽⁸³⁾
154 ところで、遺言による指名で後見人に指定された者は指定後見人、選択によって選ばれた者は選択後見人と呼ばれる。

155 遺言によって後見人が指定されなかった者については12〈表〉法により、宗族員が後見人となる。この後見人は法定後見人と呼ばれる。

156 ところで、宗族員とは男系を通じて血族関係にある者であり、いわば父に由来する血族である。例えば、父を同じくする兄弟、兄弟の息子あるいは息子から生まれた男孫であり、同様に父方のおじ、おじの息子、おじから生まれた男孫もそうである。これに対して、女系を通じて血族関係にある者は宗族員ではなく、自然法上の血族員である。したがって、母方のおじと姉妹の息子との間には、宗族関係ではなく血族関係が存在する。同様に、父方のおばの息子あるいは母方のおばの息子は私にとって宗族員ではなく血族員であり、また逆に私は彼に対して明らかに同じ関係にある。というのは、生まれてくる子は父の家に従い、母の家に従わないからである。

157 ⁽⁸⁴⁾そして12表法によれば、かつては確かに、女性も宗族員を後見人とした。しかし、後にクラウディウス法⁽⁸⁵⁾が制定されて、女性に関する限

154 Vlp. 11, 14を参照。

155 I. 1, 15pr. とほぼ同じ。Vlp. 11, 3; Gai Epit. 1, 7, 1を参照。

156 I. 1, 15, 1; Dig. 26, 4, 7 [Gai lib. 1 Institut] とほぼ同じ。Gai Epit. 1, 7, 1; Vlp. 11, 4; Isidor. orig. 9, 6, 1; 2を参照。

157 171; Vlp. 11, 8を参照。

(83) David-Nelson では「dumtaxat」の代わりに「tantum」が用いられている。

(84) David-Nelson では「そして (Et)」の代わりに「だが (Sed)」が用いられている。

(85) クラウディウス法 (lex Claudia) 前1世紀に制定された。

り、〈宗族員の〉後見は廃止された。したがって、未成熟の男性は成熟した兄または父方のおじを後見人とするが、これに対して女性はこのような者を後見人とすることはできない。

158 宗族関係は頭格消滅によって失われるのに対して、血族関係はそれによって変化することはない。というのは、市民法上の考慮によって市民法上の関係は損なわれることもあるが、自然法上の関係は損なわれないからである。

159 ところで、頭格消滅とは従来の地位の変更である。これは3つの態様において生じる。すなわち、頭格最大消滅、小消滅、これは中消滅とも呼ばれる、または最小消滅である。

160 頭格最大消滅は、ある者が市民権と自由とを同時に失う場合である。これは戸口調査の規定によって売却を命じられ、戸口調査の名簿に登録されない者に生じる。このことは、……この法律に反してローマ市に住所をもった……法律によって……。また、主人の意思および警告に反して主人の奴隷と同棲し、クラウディウス元老院議決によってそ

158 I. 1, 15, 3とはほぼ同じ。Vlp. 11, 9; 後掲3, 27; 51を参照。

159 I. 1, 16pr. とほぼ同じ。Vlp. 11, 10を参照。

160 Mo. は欠落部分を次のように補充する。すなわち、「今日ではまったく用いられていない。だが、降伏外人類に属する者がアエリウス＝センチウス法に反して……場合には、同法によって罰として自由を失う」などと。

(86) David-Nelson では「宗族員の〈adgnatorum〉」の代わりに「このような〈tales〉」が用いられている。

(87) David-Nelson では「売却すること (venire)」の代わりに「売却されること (veniri)」が用いられている。

(88) ここでは「戸口調査の規定によって売却すること (ex forma censuali venire)」を指している。なお、註87を参照。

(89) 降伏外人類がローマの100里程内に入ることを念頭においている。

(90) David-Nelson では「意思および警告 (inuitis et denuntiatis)」の直後に「主人の (dominis)」が挿入されている。

(91) クラウディウス元老院議決 (senatusconsultum Claudianum) 該当するものは後52年のものである。

の主人の女奴隷となった女性も同様である。

161 頭格小消滅または中消滅は、市民権は失われるが自由は維持される場合である。これは水火の禁を受けた者に生じる。

162 頭格最小消滅は、市民権と自由は維持されるが、人の地位が変更される場合である。これは、養子にされる者、またコエーンプティオー⁽⁹²⁾を行う自権者である女性、さらに他の者のマンキピウム権に与えられ、そうしてマンキピウム権から解放される者にも生じる。すなわち、いかなる者も他の者のマンキピウム権に与えられ、または〔マンキピウム権から〕解放されるときには、つねに頭格の消滅を受ける。

163 宗族関係は〈頭格〉大消滅および中消滅によってだけでなく、最小消滅によってもなくなる。それゆえ、家父が2人の子のうち1人を家父権から免除した場合、家父の死後、両者は宗族関係上、相互に後見人となることはできない。

164 ところで、後見が宗族員に帰属する場合、同時にすべての宗族員に帰属するのではなく、最近の宗族員にだけ帰属する。

164^a
..... (ヴェローナ写本では4行判読不能)
.....都市で...
..... (ヴェローナ写本では2行判読不能)

161 I. 1, 16, 2と同じ。Vlp. 11, 12; 前掲128を参照。

162 I. 16, 3; Vlp. 11, 13; Theoph. 1, 16, 3 [72頁1-3行]と同じ。

163 I. 1, 15, 3; Vlp. 11, 9を参照。

164 I. 1, 16, 7と同じ。Gai Epit. 1, 7, 1; Dig. 26, 4, 9 [Gai lib. 9 ad Ed. provinc.]を参照。

164^a Hollwegのほぼ正しいと思われる推測によれば、ガーイウスは氏族員の法定後見についてふれた、と考えられている。後掲3, 17を参照。おそらくガーイウスはそこで、読者を164^aに戻す。

(92) 水火の禁(aquae et igni interdictio)は国外追放にあたる。ガーイウス『法学提要』(II)訳註(37)、早稲田法学65巻2号も参照。

.....ローマで.....した
 がって、.....である.....

である.....
(ヴェローナ写本では2行判読不能).....
であること.....同じく...

165 解放された女性や解放された未成熟の男性の後見は、12表法にも
 とづいて保護者とその息子に帰属する。このような後見も法定後見と呼
 ばれる。というのは、後見に関する12表法によって明示的に規定されて
 はいないが、あたかも法律の文言によって導入されたかのように、解釈
 を通じて受け入れられているからである。解放された男性や女性が、も
 し無遺言で死亡した場合、彼らの相続財産は保護者またはその息子に帰
 属すると定めていることから、古法学者は、法律が後見もまた彼らに帰
 属するよう望んでいると考えたのである。というのは、相続に召喚され
 る宗族員はまた、後見人にもなると法律が定めていたからである。

166 保護者による〔後見の〕例にならって、〈その他の後見が〉採用
 された。⁽⁹⁴⁾〈これらの後見もまた法定後見と呼ばれている。すなわち、あ
 る者が未成熟の息子、その息子を父とする男孫および男曾孫または、成

165 I. 1, 17と同じ。Vlp. 11, 3; Gai Epit. 1, 7, 1を参照。

166 I. 1, 18とほぼ同じ。後掲172; 175を参照。欠落の部分はKr. がInst. 1, 18およ
 びGai. 1, 172から補充した。

(93) David-Nelson では「ipso, quod」の代わりに「ipso quo」が用いられてい
 る。

(94) David-Nelson では〈 〉の部分に欠落しており、「採用され (receptae)」
 の直後には、166^aの法文に記されている「他に信託上の後見と呼ばれている後見
 もある (sunt aliae tutela, quae fiduciariae vocantur)」以下の文が続いている。

熟、未成熟を問わず、娘、息子を父とする娘および女曾孫を再握取行為で買い戻す約款を付して、他の者のマンキピウム権に与え、〔後で〕これらの者を買い戻して解放した場合、同人が法定後見人となる。〕

〔信託上の後見について〕

166^a この他に信託上の後見と呼ばれている後見もある。すなわち、あるいは家父から、あるいはコエーンプティオーの買主から握取行為によってわれわれに売却された自由人をわれわれが解放したために、われわれに帰属する後見である。

167 けれども、ラテン人の女性とラテン人の未成熟の男性の後見は、必ずしも解放者に帰属するわけではなく、解放する前に〈クィリーテースの権により〉⁽⁹⁵⁾所有者で〈あった〉者に帰属する。〈したがって、女奴隷が〉⁽⁹⁶⁾クィリーテースの権によりあなたのものであり、私の財産中にある、私だけから解放されてあなたから解放されない場合には、ラテン人とされ、その財産は私に帰属するが、後見はあなたに帰属する。このように、ユニウス法には規定されている。したがって、女奴隷が、これを財産中にもち、クィリーテースの権による所有者である者からラテン人とされた場合には、その財産も後見も同じ者に帰属する。

166^a I. 1, 19と同じ。Vlp. 11, 5; 前掲115; 後掲172; 175; 195^aを参照。

167 Vlp. 11, 19; 前掲35; 後掲3, 56; Lex Salpens. c. 23を参照。括弧内の語句はHu.が付加した。

(95) David-Nelson では「その解放者 (manumissores eorum)」の代わりに「解放者およびその子 (manumissores liberosque eorum)」が用いられており、eorum の解釈が異なっている。

(96) David-Nelson では〈ex jure Quiritium fuerunt; unde si ancilla〉ex jure Quiritium がex jure Quiritium 〈fuerunt; unde si ancilla ex jure Quiritium〉になっている。なお、クィリーテース (Quirites) とはローマ市民の古い名称であり、式語でよく用いられる。これについては、ガーイウス『法学提要』(I) 訳註(7)、早稲田法学64巻1号を参照。

(97) ユーニウス法 (lex Iunia) 後19年に制定された。

168 宗族員、保護者、自由人を〔マンキピウム権から〕解放した者には、婦女後見を法廷において他人に譲渡することが許されている。これに対して、未成熟の男子に対する後見を譲渡することは許されていない。というのは、この後見は、〔被後見人が〕成熟すると終わるので、負担になるとはみなされていないからである。

169 ところで、後見を〔法廷で〕譲り受ける者は譲受後見人と呼ばれる。

170 譲受後見人の死亡または頭格消滅によって、後見は、譲渡した後見人に復帰する。譲渡した者自身が死亡し、あるいは、〔その者の〕頭格が消滅した場合には、後見は〔後見を〕譲渡された者から、譲渡した者に続くその後見についての第二順位にある者に復帰する。

171 けれども、宗族員に関しては、女性に対する宗族員の後見はクラウディウス法により廃止されたので、現在では譲渡後見人についてはまったく問題とならない。

172 他方、信託上の〔後見人〕たちは責任を自らに課したので、ある者たちは信託上の〔後見人〕も後見を譲渡する権利をもたないと考えた。そのような見解があるとしても、自らに再握取行為されるという約款により、娘あるいは女孫あるいは曾女孫を他の者のマンキピウム権に与え、そうして〔自らに〕再握取行為された女性を解放した尊属の場合には、同じことを述べることはできない。というのも、この者も法定後見人とみなされ、保護者と同等の尊敬が払われるべきだからである。

173 さらに、元老院議決により、不在である後見人に代えて他の者を

168 Vlp. 11, 6; 8; 17を参照。

169-170 Vlp. 11, 7を参照。

171 Vlp. 11, 8; 前掲157を参照。

172 I. 1, 18; 前掲166; 後掲175を参照。

173-174 Vlp. 11, 12を参照。

〔後見人として〕申請することが女性に許された。この申請によって、先の後見人は「後見人であることを」終える。この後見人がどの程度の期間不在であるかは、関係しない。⁽⁹⁸⁾

174 ただし、不在の保護者に代えて〔他の〕後見人を申請することは被解放自由人である女性に許されないことが、例外である。

175 ところで、われわれは、われわれ自身に再握取行為された娘あるいは女孫あるいは曾女孫を解放することにより、〔そのような女性に対する〕法定後見を得た尊属も、保護者のような地位にあるとみなす。〈けれども〉、彼の卑属は、信託上の後見人のような地位にあるとみなされる。これに対して、保護者の卑属は、彼らの尊属がもっていたのと同じ後見を得る。

176 けれども、時には、例えば相続財産を得るために、不在の保護者に代えて後見人を申請することが、〔そのような女性にも〕許される。

177 元老院は、保護者の息子である未成熟者についても同様に議決した。

178 また、婚姻当事者の階層に関するユーリウス法によっても、未成熟者の法定後見に服している女性には、嫁資設定のために後見人を市民係法務官に申請することが許される。

179 保護者の息子は、たとえ未成熟者であっても、もちろん、被解放自由人である女性の後見人となる。もっとも、彼自身が〔彼の〕後見人

175 〈けれども〉は Pol. が付加した。I. 1, 19; 前掲166-172を参照。

176-177 Vlp. 11, 22を参照。

178 Vlp. 11, 20を参照。

179 I. 1, 25, 13を参照。

(98) David-Nelson では「不在である (absit)」の代わりに「不在であった (ab-erit)」が用いられている。

(99) 訳には出ていないが、David-Nelson では「is」の代わりに「ipse」が用いられている。

の助成がなければ何もなすことを許されないから、いかなる事についても助成人となることはできない。

180 同様に、女性が精神錯乱者あるいは啞者の法定後見に服する場合、嫁資設定のために後見人を申請することが、元老院議決により、このような女性に許される。

181 これらの場合に後見がそのまま保護者と保護者の息子に留まることは明らかである。

182 さらに、元老院は次のように議決した。すなわち、未成熟の男性あるいは未成熟の女性の後見人が嫌疑を受け、後見から解任された場合、あるいは、正当な原因によって〔後見から〕免除された場合には、他の者が彼に代わって後見人とされ、これがなされれば、それまでの後見人は後見を失う。

183 これらすべてのことは、ローマにおいても、属州においても、等しく遵守される。もっとも、〈ローマでは法務官に〉、属州においては属州長官に後見人は申請されねばならない。⁽¹⁰⁰⁾

184 かつて法律訴訟が用いられていた時には、後見人と女性または未成熟者の男性との間で法律訴訟がなされるべき場合には、それを原因としても、後見人が付与された。というのは、後見人は彼自身の事について自ら助成者となることができないから、他〔の後見人〕が与えられ、その者の助成によって法律訴訟がなされたからである。この者は、市民

180 Vlp. 11, 21を参照。

181 本法源集所収の Lex Salpens. 29を参照。

182 Vlp. 11, 23; Dig. 26, 2, 11, 1-3 [Vlp. lib. 27 ad Sab.] を参照。

183 〈ローマでは法務官に〉は Kr.が補充した。Vlp. 11, 20を参照。

184 I. 1, 21, 3とほぼ同じ。Vlp. 11, 24を参照。

(100) David-Nelson では 〈 〉 の部分が欠落し、「属州においては (in prouinciis)」の直前に「ut」が挿入されている。

(101) David-Nelson では「申請されねばならない (peti debeat)」の代わりに、同義の「petendus sit」が用いられている。

係法務官により与えられたから、法務官の〔選定する〕後見人と呼ばれた。けれども、ある者たちは、法律訴訟が廃止された後には、後見人付与のこうした特例は用いられなくなった、と考えている。これに対して、他の者たちは、法定訴訟がなされるならば、〔こうした後見人の付与が〕今なお用いられているという見解を支持している。

185 ある者に後見人がまったくいない場合には、ローマ市においては、アティーリウス法にもとづいて、市民係法務官および大多数の護民官より〔後見人が〕その者に与えられる。⁽¹⁰²⁾これは、アティーリウス法上の後見人と呼ばれている。これに対して、属州では、〔後見人は〕ユーリウス＝ティティウス法⁽¹⁰³⁾くにもとづいて⁽¹⁰⁴⁾属州長官より与えられる。

186 したがって、遺言によって、条件付きまたは確定期限付きで後見人が指定された場合に、条件が未成就の間または期限が到来しない間は、後見人が与えられることがある。同様に、後見人が無条件で指定された場合、相続人が誰も現れない間は、これらの法律にもとづいて後見人が与えられることがある。この後見人は、遺言によって、ある者が後見人になった後は、後見人ではなくなる。

187 また、後見人が敵に捕らえられた場合、これらの法律にもとづいて〔別の〕後見人が申請されなければならない。〔その後見人は〕捕らえられた者が国家に戻った場合には、後見人であることをやめる。なぜなら、帰還者は帰国権によって後見を取り戻すからである。

188 以上のことから、後見人にいくつの形があるかは明らかである。

185 I. 1, 20pr とほぼ同じ。後掲195; Gai Epit. 1, 7, 2; Vlp. 11, 18; Lex Salpens. 29; Theoph. 1, 20 [76頁7行; 18頁21行, 1] を参照。

186 I. 1, 20, 1 とほぼ同じ。

187 I. 1, 20, 2 とほぼ同じ。

(102) アティーリウス法 (lex Atilia) 前3世紀末?, 前186年以前に制定された。

(103) ユーリウス＝ティティウス法 (lex Iulia et Titia) 前31年に制定された。

(104) David-Nelson では < > の部分は欠落している。

これに対して、これらの形がいくつの種類に分けられるのかをわれわれが問題にするならば、議論は長くなるだろう。このことについて古法学者が盛んに論じており、われわれはこの問題について告示註解とクィントウス・ムーキウス註解で詳しく述べた。⁽¹⁰⁵⁾ さしあたり次のことに注意すれば十分である。ある法学者はクィントウス・ムーキウスのように4種類あると説明した。また、セルウィウス・スルピキウスのように3種類あると説明した法学者もいれば、ラベオのように2種類あると説明した法学者もいる。他の法学者たちは形があるのと同じ数だけ種類があると考えた。

189 未成熟者はあらゆる国家の法において後見に服する。というのは、成熟年齢に達していない者が他の者の後見に服するのは自然の理に適用しているからである。自分の未成熟の子に対して遺言により後見人を指定することを親に認めていない国家はほとんどない。もっとも、われわれが前で述べたように、ローマ市民だけが自分の子を自分の権力の中にもつと⁽¹⁰⁶⁾考えられている。

190 これに対して、成熟年齢に達した女性が後見に服することにはほとんど有効な理由がなかった、と考えられる。なぜなら、通常考えられている理由、すなわち、女性は知力の薄弱により騙されることが多いので後見人の助成を受けることが衡平であるという理由は、正当であるというよりむしろ皮相である、と考えられるからである。というのは、成

188 Vlp. 11, 2; Theoph. 1, 20pr. [77頁1行]を参照。

189 I. 1, 20, 6とほぼ同じ。前掲55を参照。

190 前掲144; 後掲2, 122を参照。

(105) David-Nelsonでは「nosque」の代わりに「nos qui」が用いられている。

(106) David-Nelsonでは「ローマ市民だけが自分の子を自分の権力の中にもつと考えられている (soli cives Romani uideantur liberos suos in potestate habere)」が「soli cives Romani uideantur tantum liberos suos in potestate habere」となっており、限定の意味が強調されている。

熟年齢に達している女性は、自分のために事務を処理し、後見人は、ある場合に外見上助成し、さらに後見人はその意に反しても、しばしば、法務官によって助成人となることを強制されるからである。

191 したがって、後見人を相手取っては、後見にもとづく訴訟が女性に付与されることはない。これに対して、未成熟の男子または女子の事務を後見人が取り扱う場合には、後見人は被後見人が成熟した後で後見の訴訟により計算書を提出する。

192 確かに、保護者および尊属の法定後見は、これらの後見人が〔被後見人が〕手中物を譲渡したり、債務を引き受けたりする重大な理由がある場合を除き、〔被後見人が〕遺言をしたり、手中物を譲渡したり、債務を引き受けるために助成人となることを強制されないということで、ある効果をもつと考えられる。すなわち、これらすべてのことは後見人自身のために、無遺言で死亡した女性の相続財産は後見人に帰することになるから、〔後見人が〕遺言で相続財産から除外されることもなく、より高価な手中物が譲渡されたり、債務が引き受けられたりすることで相続財産がその価値を減じて後見人に帰することもないように、定められた。

193 外国人の場合、女性はわれわれのような後見には服しない。けれども、多くの場合、後見に服しているのと同様である。例えば、ビテュニア人の法律は、妻が取引を行う場合、夫またはその成年の息子が助成人⁽¹⁰⁷⁾になると規定している。

194 ところで、生来自由人の女性は3人の〈有子の権により〉後見を

191 I. 1, 20, 7と同じ。

192 Vlp. 11, 27を参照。

194 前掲145; 後掲3, 44; Vlp. 29, 3; Dosith. Fr. 15を参照。括弧内の語は Holl. が付加した。

(107) David-Nelson では「取引を行う (contrahat)」が「〈contra〉 hat」になっている。

免れる。〈これに対して被解放自由人の女性は、保護者〉あるいはその息子の法定後見に服する〈場合には〉、4人の有子の権により後見を免れる。その他の種類の後見人、[例えばアティーリウス法上の後見人または信託上の後見人]⁽¹⁰⁸⁾をもつ被解放自由人の女性は3人の有子の権により後見を免れる。⁽¹⁰⁹⁾⁽¹¹⁰⁾

195 ところで、被解放自由人の女性は〔生来自由人の女性と比較して〕、より多くの方法でその他の種類の〈後見人〉をもつことができる。例えば、女性によって解放された場合である。この場合にはアティーリウス法により、また属く州では、ユーリウス＝ティティウス法により、後見人を申請しなければならない。というのは、被解放自由人の女性は、女性である保護者の後見に服することができないからである。

195^a また、男性〈から〉解放され、彼の助成によってコエンプティオーを行った女性が、その後で再握取行為され、マンキピウム権から解放〈された〉⁽¹¹¹⁾ならば、保護者を後見人とするとはなくなり、彼女を解放した者の後見に服するようになる。この者は信託上の後見人と呼ばれる。

195^b また、保護者またはその息子が養子となった場合には、被解放自由人である女性はアティーリウス法とユーリウス＝ティティウス法にもとづいて後見人を申請しなければならない。

195 前掲185を参照。

195^a 前掲115を参照。

195^b I. 1, 22, 4; Vlp. 11, 9を参照。

(108) David-Nelsonでは「nam ceterae quae alterius generis」の代わりに「nam et ceterae quae alterius generis」が用いられている。

(109) David-Nelsonでは「uelut Atilianos aut fiduciarios」の部分に〔 〕は付されていない。

(110) David-Nelsonでは「habent」の代わりに「habeant」が用いられている。

(111) David-Nelsonでは「解放〈された〉(manumissa <fuerit>)」の代わりに「解放される (manumissa sit)」が用いられている。

195° 同様に、これらの法律にもとづいて被解放自由人である女性が後見人を申請しなければならないのは、保護者が死亡し、男性の卑属を家族にまったく残さなかった場合である。

196 男性は成熟すると後見を免れる。ところで、サビーヌスとカッシウス、その他われわれの諸先生は、身体の外観によって成熟していることを示した者、つまり生殖機能のある者を成熟していると考える。もっとも、性的不能者のように、成熟できない者については、その年齢が考慮されなければならないとしている。けれども、別の学派の諸権威は、年齢によって成熟を判断すべきだと考えている。すなわち、14歳に達した者は成熟していると判断する。……………

197 ……………

……………(ヴェローナ写本では23行判読不能) ……………

……………自分の事務を処理できる年齢に達する…。われわれは、外国人の間でもこのような監督がなされていることをすでに述べた。⁽¹¹²⁾

198 同じ理由により、属州においてもその長官から保佐人が与えられるのを常とする。

195° 前掲179を参照。

196 I, 22pr. と同じ。Vlp. 11, 28; Paul. 3, 4^a, 1; 2を参照。Hu. のほぼ正しいと思われる推測によれば、本節の欠落部分においてガーイウスは、Vlp. 11, 28から明らかに、成熟に関するネラティウス・プリスクスの見解に言及してから、保佐人に関する Vlpianus 12, 1-4と Gai Epit. 1. 8に記されている順番に従って、保佐に服している者 (1, 142; 143を参照) について述べたと考えられている。

197 前掲189; Gai Epit. 1, 8; Vlp. 12. 4; I. 1, 23pr. を参照。

198 Dig. 26, 5, 8, 3 [Vlp. lib. 8 de omnib. trib.] を参照。

(112) David-Nelson では冒頭「aetatem」の直前に「ad ea」が付加されている。

199 もっとも、未成熟者〔被後見人〕および保佐に服する者の財産が、後見人および保佐人によって浪費されたり、減少されたりしないように、法務官は後見人〈および〉保佐人が彼の名義で担保を設定することを命じる。

200 けれども、これはすべての場合にあてはまるわけではない。すなわち、遺言により指定された後見人は担保を設定することを強制されない。というのは、彼が誠実であるということは遺言者自身によって認められているからである。また、法律にもとづいて保佐人となるのではなく、執政官または法務官または属州長官により与えられる保佐人⁽¹¹³⁾も、一般に担保を設定することを強制されない。というのは、当然、十分信頼に値する者が選ばれているからである。

199.200 I. 1, 24pr.; I. 1, 20, 3とはほぼ同じ。

(113) David-Nelson では〈 〉の部分は欠落している。